



世界的ベストセラーになった本たち  
 神奈川大学図書館蔵

## 目次

### ■特集

みんなに教えたい・みんなの知らない  
 私だけのベストセラー・・・2頁

人間科学部人間科学科 准教授	前原 吾朗
工学部情報システム創成学科 教授	杉本 剛
経営学部経営学科 教授	岡本 祥子
理学部数理・物理学科 准教授	木村 敬

■〔連載〕書物の歴史 2. 様々な本の形・・・6頁

■《図書館の所蔵資料紹介》  
 ダヴズ・プレス刊『欽定英訳聖書』・・・7頁

■図書館からのお知らせ  
 今号の表紙  
 編集後記・・・8頁

### 本の歴史を変えた人々⑤

エドワード・ジョンストン  
 (Edward Johnston, 1872-1944)

タイポグラファー(書体デザイナー)、カリグラファー、工芸家。ロンドンの地下鉄の駅名表示《ロンドン地下鉄書体》をデザインしたことで有名である。

プライベート・プレス運動にも積極的に関わりダヴズ・プレス刊『欽定英訳聖書』に、自らのデザインによる見出し書体を提供している。タイポグラファーとしての弟子には同じくプライベート・プレスのゴールデン・コッカレル・プレスに関わったエリック・ギルがいる。

人気作家の最新作や文学賞の受賞作など、2013年も多くの本が話題に上りました。でも、そんな風に話題になることは少ないもののこれこそは名著であると思う本、あまり知られていないけれど大好きだ、という本は誰にでもあるのではないのでしょうか。そのような本を紹介していただく特集です。

## 戦場のピアニスト／ウワディスワフ・シュピルマン著；佐藤泰一訳、 春秋社 2003年

人間科学部人間科学科 准教授 前原 吾朗

「戦場のピアニスト」は僕が一番好きな映画です。第二次世界大戦中のポーランドでナチスの迫害を逃れて生き残ったユダヤ人ウワディスワフ・シュピルマンの実話がもとになっています。映画で描写されるワルシャワの街並みの美しさ、ゲットーや強制労働の悲惨さ、広大な廃墟の虚無感はとても印象的です。今回紹介する本は映画の原作ですが、読む前に映画を観ておくと風景をイメージできるのでよいと思います。

シュピルマンはピアニストで、戦争の英雄とは程遠い人物です。むしろ戦時中は役に立たないタイプの人で、家族を助けようとしたり、抵抗運動を手伝ったり、隠れて住んだりするのですが、それらはことごとく挫折します。しかし、その度に思いがけず助けしてくれる人が現れます。決して自分の思い通りにはいかないのだけれど、窮地に手を差し伸べてくれる人がいることに僕は胸が打たれます。多くの人の人生もそうしたものののではないのでしょうか。生き残るといふ強い意志を失わなければ、どこかで誰かに助けられるのだと思います。ただ、シュピルマン自身からそうした強い意志の表明はありません。彼は日々の苦しい生活をなんとかこなしているだけです。こういうところもフィクションと違って、リアルに地味です。

本書やその映画に共通しているのは、劇的な部分が少ないという点です。ユダヤ人迫害がテーマの作品ですから、怒り、悲しみ、恨みを強調することは容易だと思いますが、むしろそれらは抑制されています。しかし、それ故に、深い悲しみを秘めている印象を受けます。また、劇中にはナチスに協力するユダヤ人警察やポーランド人など様々な立場の人々がいるのですが、そうした人々に対するシュピルマンの赦しも感じられます（もちろん複雑な思いは残っていると思いますが）。本書を読むと、当時、多くの人が抗うことのできない大きな流れに身を任せざるをえなかったというのがよくわかります。

シュピルマンは戦争を生き延び、本書は「ある都市の死」とのタイトルで1946年に初めてポーランドで出版されました。しかし、ほどなくして発禁に近い形で絶版処分となったそうです。そして、再度発行されるまでには50年以上の歳月を必要としました。当時の政治背景では不都合な事実が本書には含まれていたからです。戦後のポーランドや東ヨーロッパ諸国において、本書の何が受け入れ



がたかったのかを考えてみるのも面白いでしょう。政治は、しばしばステレオタイプ的な物の見方を強いてきます。そこでは、多くの例外が存在することは無視され、わかりやすい均一的な考えが強調されます。こうした意見の斉一化圧力が強い状況では、大参事を招くような愚かな決定が集団でなされる傾向（集団思考と呼ばれる）があることが心理学研究によって示されています。集団思考を避けるには、情報を公開して、各個人が不都合な事実を認めることが重要です。

「戦場のピアニスト」には劇的な部分が少ないと書きましたが、終盤にクライマックスがあります。そこでシュピルマンは予想外の人物に助けられ、破滅が生存にひっくり返ります。その人物の日記が本書には収録されており、映画ではあまり描かれなかった彼の人物がうかがえます。映画を観て、内容を知っているよという人も是非本書を読んで欲しいと思います。

## セント・ヘレナ島に立ち寄った天正遣欧使節

工学部情報システム創成学科 教授 杉本 剛

大西洋の孤島セント・ヘレナは、1502年にポルトガル人ホアン・ダ・ノヴァが発見した。ポルトガル王の勅命は、ここを水と新鮮な食糧の補給のためのみに利用し、人の定住を許さないというものであった。はじめポルトガルは島の存在を秘匿したが、やがては各国の航海家の知るところとなり、17世紀にイギリスが占有して、東インド会社が常駐した。ナポレオンの流刑先として有名である。

実は今年の夏、全行程21日かけた旅して島を訪れ、8泊9日のフィールドワーク生活を送った。目的は二つあり、この地で水星の太陽面経過を観察したエドモンド・ハレーと金星の太陽面経過を観察したネビル・マスカリンらの天文台に関する調査がひとつで、島を訪れた日本人の足跡調査がもうひとつである。

キリシタン大名の大友宗麟・大村純忠・有馬晴信は、イエズス会巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノの発案を受け入れ、名代として血縁の少年4名をローマ法王グレゴリウスXIIIに謁見する目的で送ることにした。使節は、1582年2月に長崎を発って、1584年8月にリスボンに到着し、念願の法王謁見を果たしただけでなくヨーロッパ各地で歓待を受けた。1586年4月リスボンを発って帰路についた使節は、1590年7月に長崎に戻ったが、それは秀吉が伴天連追放令を出した後のことで、使節の末路は悲劇で終わる。

使節がセント・ヘレナに立ち寄ったのは、往路の1584年5月27日から6月6日にかけてである。少年たちは、島での生活を楽しんだ。木造のチャペルでの朝のお祈りはもちろんだが、魚を食べきれないほどたくさん獲ったのである。使命の重圧と旅での困苦から一時解放されて、子供に戻れた日々だったろう。彼らは、「鳥の子」とよばれる丈夫な和紙に、この島に至った経緯と残る航海の無事を祈る書を認め、チャペルの壁に貼って奉納した。残念なことに、このチャペルのひと欠片すら現存しない。

使節の訪問は、カソリック系ヨーロッパではセンセーショナルに受け止められ、各地でパンフレットや書物が発行された。これら刊行物は、東京大学史料編纂所によって「**大日本史料**」第十一篇の別巻之一および別巻之二（東京大学出版会、1959および1961）としてまとめられている。木下空太郎は、法王側近の文学者グイド・グワルチェリが著した関連書（1586）を訳すためにイタリア語を習い、「**日本遣欧使節記**」（岩波書店、1933）として公にした。ドゥアルテ・デ・サンデすなわちイエズス会士自身の手による使節の記録は、帰国した使節の少年たちが親族の少年たちと旅について語り合う形式をとったフィクション仕立てで、1590年にマカオで刊行された。これは、泉井久之助・長澤信壽・三谷昇二・角南一郎訳「**デ・サンデ天正遣欧使節記**」（雄松堂書店、1969）として読める。これら当時のベストセラーの中で、セント・ヘレナの存在が初めて公にされた事実は知られていない。

マカオのイエズス会修道院には著者不明の写本が長い間眠っていて、20世紀になって初めて日の目を見た。邦訳書は、伝ルイス・フロイス著・岡本良知訳「**九州三侯遣欧使節行記**」（東洋堂、1942）だが、稀覯本である。

禁教令と鎖国の所為で、日本人自身は天正遣欧使節のことを忘れ去ってしまう。使節の記録が掘り起こされたのは、フランス人イエズス会士ジャン・クラッセの著作（1689）が太政官翻訳「**日本西教史**」（坂上半七、1878）として刊行されたときである。しかしながら、日本人が忘れていた歴史を、1874年12月9日の金星太陽面経過を観測するため、横浜にやって来たメキシコの天文学者ディアス・コバルビアスは知っていた。大垣貴志郎・坂東省次訳「**ディアス・コバルビアス日本旅行記**」（雄松堂書店、1983）には、天正遣欧使節について触れた一節がある（原著は1876年刊）。

## 2050年の世界：英『エコノミスト』誌は予測する／

英『エコノミスト』編集部 船橋洋一解説、文藝春秋 2012年

経営学部国際経営学科 教授 岡本 祥子

巻末にも書いてあるが、英『エコノミスト』誌とは1843年に英国で創刊された週刊誌である。ニュースをただ報道するのではなく、その背後の意味、将来に与える影響を解説し、大きなトレンドを深い洞察をもって伝える特集スタイルの記事を得意とする。インターネット全盛の時代に、没落するほかの紙媒体をしり目に、2000年には100万部だった部数を2012年には160万部まで増やしている。グループ内にエコノミスト・インテリジェンス・ユニットというシンクタンクを抱えているのも特徴の一つで、単なる印象論ではなく、膨大なデータを基にした分析でも定評がある。200か国以上で読まれ、アメリカの読者の3分の2の年収が10万ドル以上であるなど、グローバルエリートが読む雑誌のひとつでもある。

この本が、「みんなが知らない・・・」となるのか、正確なところわからないが「・・・私だけのベストセラー」であることは確かである。とにかく内容が予言本でなくて予測本であるため、現状分析や経済統計・科学の進捗具合から導き出す予測など、読者を説得し、頷けるような面白さを満載しているので、自分の進むべき未来社会の姿に少し不安がある人たちに読んでもらいたいと思い、私に興味をひかれた部分を本から引用し簡単にご紹介してみた。

本書の目的は、人々のあらゆる側面から世界を変革するトレンドを特定して探究すること。そしてここで確認したトレンドによって、2050年の世界がどのように形作られるかを予測することである。例えば人口統計に関しては、実際に近い数字がはじきだせるだろうし、世界人口にまつわるトレンドは、人間、地球、経済、知識という4つのカテゴリーに分類され、大きな変化を理解するように導き出されている。また、2050年を予測する各章執筆者の共通項として、まず、流れが途絶えた過去の時点を積極的に分析すること。第二に、新興諸国の急激な発展と、女性の教育及び機会の向上が、非連続的な社会変化につながるということ。第三に、2050年のアジアは、世界経済の50%以上を占有すると予測していることからわかるように、アジアとりわけ中国の隆盛を重視する姿勢がみられること。そして、最後に、40年後の世界は可能性に満ち溢れていて、とても幸福で素晴らしい社会が来るといふ結論を導きだしている。この部分には、少し疑問が残るが、他は納得できるものである。

私が特に関心をもった章は「経済とビジネス」の項目である。ここ数十年の間に、BRICSという言葉を使って新興国市場の成長を唱えたが、実際はその予測を2倍くらい上回る規模にブラジル、ロシア、中国は成長した。2050年までに、経済の世界規模で上位7か国にのこるのはアメリカ、中国、インド、ブラジル、ロシア、インドネシア、メキシコであると予測している。日本は入っていないし、それどころか、まとめの部分で述べられているように、日本は相対的に、急速にプレゼンスを失い、2010年には世界経済の5.9%を占めていた日本のGDPは、2030年には3.4%、2050年には、1.9%になる。経済成長のスピードも西ヨーロッパを下回り、今後40年間を通して、1.1%から1.2%で推移する。その結果、2010年には、アメリカの70%あった日本のGDPは、2050年には相対的に58.3%まで低下すると予測されている。

この本に書かれている数値に導かれている予測が正しいのか、それとも「統計のウソ」であるのかは、この本を読み、自分で統計に基づいて推計してみたらどうであろうか！



## 高学歴ワーキングプア：「フリーター生産工場」としての大学院／ 水月 昭道著，光文社 2007年

理学部数理・物理学科 准教授 木村 敬

「末は博士か大臣か」という言葉がある。昭和の時代、この言葉には、明確に尊敬の念が込められていたように思う。・・・(中略)・・・だが、時代が移り平成となった今、「博士＝先生」という構図は、もはや成立することの方が珍しくなった。平成の世では、「博士＝フリーター」だからである。”(本文より)。

この本を推奨するのは、まさに私自身がいつか書きたいと思っていた内容の本だったからだ。「大学院重点化」が始まったとき学生だった私は、「ポストク(有期博士研究員)1万人計画」の1万分の1として、ポストク時代の7年間、4つの大学・研究所を流浪した。本学で2年間の任期付き助手の後、任期設定のない講師に就いたのは36歳のときである。長かったポストク時代には、大学院、特に博士後期課程に進もうかどうか迷っている学生の相談を受けることも多く、自分の経験から率直な助言をすることもあった。そのようなときに、「この本を読んでみたら？」と勧められるような本があればと感じ、いずれ同じ悩みを持つ多くの学生たちの助けになるような本を書きたいと思っていたのだ。

勿論私自身、大学院を一概に負に評価しているのではない。進学に相応しい能力と意欲を持っている学生は、社会全体のためにも大学院で学ぶべきであるし、社会も大学院で学んだ学生を重用すべきである。現在でも特に理工系の修士課程修了者については、企業規模にもよるが、重用される土壌が醸成されつつある。また、特に高度に専門化された分野には、博士課程まで進まずに十分なプロとしての実力をつけることがほぼ不可能なものも事実として存在している。

しかし、だからと言って、全ての学生に大学院、特に博士課程に進学すべきだとはとても言えない。「30歳近くまでずっと勉強して来ました。専門分野の知識には自信があります。勉強は好きです。」と言ったところで、社会経験がほぼゼロの人間を受け入れるほどの余裕はほとんどの企業にはない。待遇も一部の大企業の研究所などを除けば、いきなり年齢相応というわけにもいかない。新入社員を一人前にするには相当の時間と手間がかかる。だから出来るだけ若くて柔軟性のある人材が欲しく、特に博士課程まで終えた30歳近い人間を鍛えるのは大変だというのが企業側の本音だろう。

大学院重点化は、一部の教授たちにとって錦の御旗となった。分野によっては、大学院生というマンパワーがあるとないとでは、研究室の業績が大きく変わってくる。重点化によって増えた大学院定員を充足させるといふ大義名分のもとに、大学院進学を過度に進める教授が増えた。勿論、学生の適正をしっかりと見定めた上で、勧めるべき学生には進学を勧めるのも教授の仕事だ。しかしながら「先生の勧めで博士課程まで出たけれど結局大学にポストがなかった。企業の研究所に行けたらとも思っていたけど、競争が激しくてとても無理だった。」という話も大変多い。さらには、博士課程修了時に新しい道を探せばまだ何かあったかもしれないが、数年任期のポストクになれたがために却って踏ん切りがつかず、いくつものポストクや非常勤講師を渡り続けた結果、40歳を超えた今でも大学や研究所の常勤職には就けずじまいという人もこれまた多い。大学や研究機関の常勤職の定員は増えていないのに、大学院生だけが急激に増えた結果、超供給過剰なのだ。そしてこれは重点化が始まった時点で容易に想像がついたはずの結末なのである。遡って、大学院重点化を進めた側には何の責任もないのだろうか。

本題の本の紹介に戻ると、非常勤講師(出版当時40歳)の著者によって、この乱文で私が言いたかったことが、様々なデータや事実をもとに強い説得力をもって述べられている。同じ著者による「ホームレス博士」などの近著も非常に興味深い内容となっている。将来の大学院進学を考えている学生諸君には、最終的にどのような進路を目指すにしろ、参考になる内容だと思うので、是非読んでいただきたい。

昨今の電子書籍の隆盛に伴い、紙の書籍は消滅するのではないかとされている現在、書物は大きな転換期を迎えています。第一回ではパピルスから羊皮紙へ、卷子本から冊子体への変化について解説しましたが、今回は現在ではほとんど作られていない様々な冊子体の形態について紹介します。

### 3. 冊子体のバリエーション

冊子体の書籍は、それまで書物の形態として主流だったロール状の卷子本から徐々に移行し、2－4世紀には主流の形態になったと言われる。以来、現在までその形態は変わらないが、一口に冊子体と言ってもその製本法、形などは時代とともに様々なバリエーションが生まれた。

#### 最も古いスタイル－コプト式製本

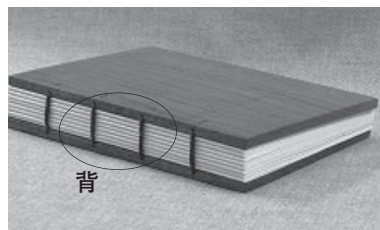
“コプト”とはエジプトのキリスト教徒を指し、初期のキリスト教徒によって使われた製本の方法である。コプト装幀は最も古い冊子体製本のスタイルで、写真の本は現在の本の形とは異なり、背が覆われていない。



#### 芸術品のような本

教会の祭壇に置かれるミサ用の典礼書などでは、象牙彫や宝石や七宝をちりばめた表紙を付けた本が作られた。信仰に対する重要性を際立たせるために美しく豪華に飾られ、本は芸術品になった。

コーデクス・アウレウス装幀版（870年頃）



#### バンド付の本

本のページに羊皮紙を使っていた時代、本が反りかえったり波打ったりしたため、重さのある表紙で綴じ、留め金のついたバンドをつけて閉じるようにしたスタイルの冊子が作られた。ページの材料が羊皮紙から紙に変わってもこのスタイルで作られた本は多くある。



#### 金具付の本

かつて本は現在とは異なり横にねかせて置かれるものだった。そのため四隅や中央に金属の飾り鉾をつけ、支えにした本が作られた。大型で重量のある本はページを開いて読む際に金属の飾りが脚となって本体を支えた。



一言で冊子体といっても、本を構成する材料やその利用目的によって、様々な形態の本が作られていたことがわかります。やがて本の外見である装丁には、装幀家の美意識が反映された素晴らしいデザインが施されたものが作られるようになっていきます。〔続く〕

ダヴズ・プレス刊『欽定英訳聖書』 全5巻

The English Bible. Hammersmith : Doves Press, 1903-05.

請求番号: A193-1~5-182 横浜貴重書庫

「世界三大美書」と言われる書物がある。ケルムスコット・プレス刊『チャーサー著作集』、アシエンデン・プレス刊『ダンテ著作集』、そして本書、ダヴズ・プレス刊『欽定英訳聖書』である。これら3冊はいずれも19世紀イギリスで起こったある運動の中から生み出された。

18世紀、世界に大きな変革をもたらした産業革命は、工業化による技術革新や経済成長のみならず、社会を根本から変化させ人々の生活をも変えた。しかし「世界の工場」となったイギリスでは、労働者の悲惨な生活環境が当時の文学作品などに表われているように、技術の進歩によってもたらされたものが人々にとっては必ずしも良い面だけではない事に気づかされる。

19世紀になると「社会はそれにふさわしい芸術と建築を生み出すはずだ」という確信に由来する「アーツ・アンド・クラフツ運動」が起こる。美しくも機能的でもない機械生産の生活用品が大量に巡回していた当時、近代デザインの創始者とされるウィリアム・モリスによって提唱されたこの運動は、数々の美しい工芸品を作り出したことで広く知られている。だがその根底にある思想は、産業革命による進歩の代償として人々から労働の喜びと生活の美が奪われた事に対する異議申し立てである。



アーツ・アンド・クラフツ運動は当時、機械使用の増加と価格競争によってその水準が衰退していた出版・印刷の分野にも影響を及ぼした。その運動の一環として生まれたのが「プライベート・プレス（私家版印刷所）運動」である。理想の書物－印刷者が印刷する作品を選び、自らの理想とする方法で美しく目にも読みやすい本－を作るプライベート・プレスでは、独自にデザインされた活字、厳しく吟味されたインク、紙を使い本が作られた。また、機械労働によって奪われた生産の喜びを取り戻すべく、手仕事による制作を重んじた。冒頭にあげた「三大美書」はいずれも当時の代表的なプライベート・プレスによって制作された書物である。

本書『欽定英訳聖書』を作ったダヴズ・プレスは、エマリー・ウォーカーとT.J.ゴブデン＝サンダーソンによって設立された。本学図書館が所蔵するのはその500部のうちの1部、全5巻である。計算しつくされた余白、ウォーカーによってデザインされた活字、ゴブデン＝サンダーソンによって装幀された白いヴェ

ラム製本の簡素な美しさは、その後の書籍デザインに大きな影響を与えたとされている。また、当時のプライベート・プレス刊本は、書籍出版の世界に美術工芸という基準をもたらし、出版・印刷文化に多大な影響を残した。

電子書籍が紙の本にとって代わろうとしている現在、美しい本にはいかなる意味があるのだろうか。本はそこに書いてあることが読めればその役割は果たしたと言えるかもしれない。だが、人は読書という行為をそれほど割り切ることができるものなのだろうか。紙の手触り、作品の精神と一体となった美しい活字、心地の良い余白は、周囲の雑音に気を取られ、彷徨い出す読み手の心をその美によって引きもどしてくれる。気高い理想を持って作られた書物を読むことは、そこに宿った制作者の思想と才能を理解することであり、読み手に程よい緊張感と幸福感をもたらす。美しい本とは、人生における大きな喜びであり、貴重な体験なのである。

参考文献：C.フランクリン『英国の私家版』、G.ネイラー『アーツ・アンド・クラフツ運動』、他

## 図書館からのお知らせ

### 横浜・平塚共通

#### ◎冬季、春季長期貸出について

対 象：学部生・科目等履修生

冬季長期貸出期間

2013年12月9日(月)～

2013年12月26日(木)

返却期限日

2014年1月10日(金)

春季長期貸出期間

2014年1月25日(土)～

2014年3月22日(土)

返却期限日 2014年4月7日(月)

※ただし卒年次生は2014年3月19日(水)

#### ◎年末年始の休館日について

期 間：2013年12月27日(金)～

2014年1月5日(日)

#### ◎一般公開休止について

後期試験につき、下記期間一般公開を休止いたします。

2014年1月6日(月)～2014年2月1日(土)

### 平 塚

#### ◎休日開館の実施について

後期試験期間につき、休日開館を行います。

日 程：

2014年1月12、13、19、26日の各日曜、祝日

開館時間：9：10～16：50

#### ◎1月18日(土)の開館について

休講につき開館時間を短縮します。

開館時間：9：10～16：50

### 編集後記

1998年の小説、ジェイムス・ロング著『ファーニー』は、一組の男女の生まれ変わりをテーマにした物語である。翻訳版はすでに廃版になっており、日本ではあまり知られていない作品のようだ。

物語は主人公の女性ギャリーが夫と偶然に立ち寄った田舎のコテージで一人の老人に出会うところから始まる。風雪に鍛えあげられたがっしりとした体躯に海のような青い目をしたこの男は、驚いたことにギャリーと自分が1300年も前から夫婦だったと告げるのである。老人の名はファーニー。ファーニーとギャリーは繰り返し生まれ変わり、ある時は同じ家に兄妹として生まれ、ある時は夫婦として共に生き、ある時は出会うことすらできずに生と死を繰り返す。物語にはサクソン人の襲撃、モンマス公の叛乱、画家コンスタブルとの交流など、実際のイギリス史上の人物や出来事が二人の人生の中で重要な役割を果たす。

ファーニーが時の流れをとらえる独特の考え方をギャリーに語るくだけは興味深い。彼は彼の生まれた1907年から彼の年齢83年分を時の流れと反対に進めていく。一度で1824年、もう一度進めると1741年、もう一度、1658年、オリバー・クロムウェルが死んだ年。ここまで来るのに人の一生をたった4回分廻ればいいのだと。人の一生は駆け抜けていくようなもの、歴史は人が考えるよりもずっと短いんだよ、とファーニーは語る。

人の一生が駆け抜けて行くように過ぎていくものなら、私達の生きるこの時代もあっという間に一生の数回分で廻れる「歴史」になってしまうのだろう。その時、この時代は平和の長く続いた幸福な時だったと語られることを願う。(N.E.)

## 今号の表紙

### 世界的ベストセラーになった本たち

写真の本は世界的なベストセラーになり、現在でも売れ続けている本。上から「ハリー・ポッターシリーズ」「薔薇の名前」「華麗なるギャツビー」「星の王子さま」「風と共に去りぬ」。今号の特集では先生方による“私だけのベストセラー”を掲載。